

主題:「共に生きる」

講師:竹中 俊さん(一般社団法人 Child Support Organization 代表)

演題:「ネパールで10年間の生活 ～児童養護施設の子どもからのメッセージ～」

去る2026年5月29日(金) キリスト教教育週間 全日行事の講師として、竹中俊さん(一般社団法人 Child Support Organization代表)をお招きして講演をお聴きしました。

サッカー少年だった竹中さんが、学生時代に海外に旅をし、ネパールにたどり着きます。その旅の中での出会い・体験から、気づけば10年間も現地のこどもたちと関わる働きをするようになっていました。子供たちをはじめとするすべての人々から、本当の幸せの意味、共に生きる意味を問いかせられ、教えられ、またわたしたちが生きるこの時代の抱える社会、経済、教育の格差、差別や長くその地で続いてきた偏見、習慣を改善し、何よりも現在をそして未来を生きるネパールのこどもたちの幸せのために生きること喜びを感じる竹中さんの姿・言葉は、わたしたち講演を聴くすべての人たちにとって、自らの在り方を見つめ直し、これからの生き方を考える尊い機会となりました。

以下に、生徒のみなさんが書いてくださった感想文をご紹介します。

①

私は、竹中 俊さんのお話を聞いて思ったことが三つありました。

一つ目はネパールの人が病気になるために気を付けているということです。

最初私はその話を聞いて「どういうことだろう？」と気になりました。その内容は人に良い言葉をかけるとその言葉をかけられた人は元気になる、良い気持ちになる。一方で嫌な言葉をかけられたらその言葉をかけられた人は元気ではなくなる、悲しい気持ちになるということでした。確かに私も良い言葉をかけてもらうと元気になります。しかし、嫌な言葉をかけられると、一気に気分が下がるなと思いました。なのでこれから私は自分が聞いてうれしい言葉、言ってもらえたらいいなという言葉友達や家族など、周りの人にかけていこうと思いました。

二つ目は自分の今いる環境を大切にすることです。

私はたった一つのこと「私って幸せじゃないんだ」と思ったり、すぐに今おかれている環境について「いやだ」とネガティブに考えてしまいます。しかし、ネパールの人は『家族と一緒にご飯を食べることができて幸せ』、『日本人の友達ができると幸せ』という、私たちからすると「そんなこと？」とってしまうようなことでも幸せだと言っているそうです。ネパールの人や困っている人からすると、だれかと一緒にご飯を食べること、新しくだれかと友達になることはとても幸せなことなんだということがわかり、私はこれからは自分の今いる環境を大切に、ネガティブに考えず、ポジティブに考えようと思いました。

三つ目は中学生になった私は何ができるのかです。

私は今までCMなどで、困っている人がいる、支援が必要だということを見ても「今の私には何にもできないから関係ないな」と思い「ふーん」という感じで見ていましたが、これからはそのCMなどを見たときただ「ふーん」と何にも考えずにいるのではなく、小学生の頃は何もできなかったけど中学生の私なら何かできるのかもしれない、私が将来大人になったとき、支援が必要な子供達をどうやったら助けられるかなどを考えて過ごしていきたいです。

そしてこうやって実際にネパールの人にあつた人などがお話をしてくださる機会はあまりないと思ったのでこれを機会にあらためて深く考えようと思いました。

②

私は今回の講演を聴いて、「共に生きる」という言葉について深く考えることができました。竹中俊さんは、2016年からネパールで児童養護施設を運営し、親を失った子どもたちの支援を続けているそうです。ネパールの子どもたちの生活や教育について、日本では知ることのできない現状をたくさん知ることができました。講演の中で特に印象に残ったのは、子どもたちが厳しい環境の中でも笑顔忘れず、一生懸命生活しているということです。私は普段、学校に通えることや毎日ご飯を食べられることを当たり前だと思っていました。しかし、世界にはその当たり前が難しい子どもたちもいると知り、自分がどれほど恵まれた環境で生活しているかを改めて感じました。また、竹中俊さんはネパールの子どもたちと家族のように関わりながら生活している

そうです。その話を聞いて、人とのつながりや支え合うことの大切さを感じました。私は今まで、自分のことだけで精一杯になることもありましたが、困っている人に目を向けたり、相手の気持ちを考えたりすることが大切なのだと思います。今回の講演を通して、世界にはさまざまな環境で生活している人がいることを知り、自分でできることを考えるきっかけになりました。これからは周りの人への感謝を忘れず、小さなことでも誰かの役に立てるように行動していきたいです。そして、「共に生きる」という気持ちを大切にしながら生活していきたいと思いました。

③

竹中俊さんは、大阪出身という共通点や私が働きたいと思っている児童養護施設で務めているということもあり、これまで私が聞いた講演の中で、一番印象に残りました。

講演を聞いて、特に印象に残ったのは「命を削って働いたのに、命に必要なものに使っている」「病気になるために言葉を意識して生活している」という2つの話です。

お金を稼いだら買いたいものとして、私が思いつくのは推しのグッズや食べ物くらいでした。だからこそ、「命に必要なものに命を使っている」という言葉を聞いたとき、すごく心に刺さりました。

その後、俊さんが「自分の人生において大切なものは体験と思い出」と言っていました。推しのグッズや食べ物は一時の快感しか感じられず、すぐ無くなってしまうけれど、体験や思い出の中で得たものは、自分に一生心に残るものだと気づきました。

また、俊さんが旅の途中に出会ったおばあさんに聞いた「病気になるために言葉を意識して生活している」という話も心に刺さるものでした。

ネパールでは病気になるために、食生活や睡眠時間だけではなく、言葉も意識していることに衝撃を受けました。それから話を聞いている中で、ネガティブな言葉は相手を傷つけると同時に、無意識のうちに自分も傷つけているのではないかと思います。

私も日々の生活の中で、適当な言葉や相手を傷つける言葉ではないことをしっかりと考えてから話すようにしたいと改めて思いました。

また、ありがたいことに質問の機会をもらいました。「大学生の頃(活動を始めたばかりの頃)はどうやって活動資金を集めていましたか？」と質問をしました。私自身、「児童養護施設で働きたい」「困っている子供のために何かしてあげたい」などと考える中で、何をやるにもお金が必要で、資金面で考えあぐねていました。俊さんからの答えを聞いて、今まであまり興味のなかった大学にも、可能性があると思い、すごく興味が湧いてきました。今できる体験、今出来る思い出は後からでは出来ないと思います。まずは今、自分のできる勉強を精一杯頑張ろうと思います。また、近くでボランティアがあったら夏休みに取り組みのためにこれから詳しく調べてみようと思います。

最後に私が思う「共に生きる」とは、隣人と認め合うこと、そして隣人を愛することだと思います。「共に生きる」「隣人を愛する」といった抽象的な言葉だけ聞くと難しいように感じますが、よく考えてみると案外自分でも出来るかもしれません。認め合うとは、良いところも悪いところも愛するということです。隣人と聞くと遠い存在に感じますが、隣人と言ってもたくさん種類があります。世界中の人々、生活を共にする学校の人、毎朝お弁当を作ってくれたり家族のために働いてくれるお母さんお父さん。皆、隣人です。私はまず、身近な人たちと認め合えるように心がけていこうと思いました。

④

私は今回の講演を通して、ネパールの子どもたちから竹中さんが学んだことを聞き、新たに気づいたことがたくさんありました。

まず、心に残ったのは「言葉の力」です。ネパールの山に住む人々は、病気になると病院まで担いで運ばなければならなかったり、治療にお金がかかったりと、想像以上に大変な苦勞があります。そのため、病気になるための予防をとっても大切にしているそうです。私は、何に気をつけているのかと聞かれたら睡眠だと思いました。しかし、実際は言葉だと聞き、とても驚きました。最初は、なぜ言葉が病気の予防につながるのか理解できませんでした。しかし、その後のお話を聞いて納得しました。それは、「あたたかい言葉を聞くと元気が出る」ということです。私自身も、「ありがとう」や「楽しい」などの明るい言葉を聞くと前向きな気持ちになります。反対に、「もうだめだ」や「どうせできない」などの暗い言葉を聞くと、気持ちが沈んでしまいます。このように、言葉には人の気持ちや心の状態を変える力があるのだと思いました。また、自分が発した言葉は、自分

自身が一番よく聞いています。その話を聞き、私もこれからは前向きで明るい言葉を意識して使っていきたいと思いました。

次に考えさせられたのは、幸せとは何かということです。私は、ネパールの子どもたちは、欲しい物が手に入らなかったり、食べたい物を自由に食べられなかったりするため、幸せとは言えないのではないかと考えていました。しかし、竹中さんが子どもたちに尋ねると、幸せだと答えたそうです。その理由は、友達と外で遊べることや家族みんなでご飯を食べられることなど、私たちにとって当たり前を感じる日常にありました。私はその話を聞き、住んでいる環境や地域が違って、人が幸せを感じる瞬間には共通するものがあるのだと感じました。また、他人と比べるのではなく、今自分の周りにある当たり前の幸せに気づき、それを大切に守っていくことが大事なのだと思いました。

今回の講演を通して、私は「言葉の力」と「当たり前の中にある幸せ」の大切さを学びました。これからは、前向きな言葉をたくさん使うことを心がけるとともに、友達と遊べることや家族と一緒にご飯を食べられることへの感謝の気持ちを忘れず、日々の生活に活かしていきたいです。

⑤
今回、竹中俊さんの講話を聞き、私は普段の生活では気づくことのできない世界の現状や、人として大切な考え方について深く学ぶことができた。特に、ネパールでの支援活動を通して見えてくる貧困や差別の問題、そしてその現実に対して実際に行動を起こしている竹中さんの姿勢が強く印象に残った。

講話の中で特に心に残ったのは、「今あなたが持っている物は、本当に人生に必要なものか」という言葉である。私は普段、当たり前のようにスマートフォンや服、食べ物に囲まれて生活している。しかし、それらが本当に必要なのかを深く考えたことはなかった。また、「働いている時間や疲れは、自分の命を削っている」という言葉からは、時間の大切さや、自分の生き方について考えさせられた。さらに、「自分の言葉を一番聞いているのは自分」という話から、自分自身の考え方や発する言葉によって、気持ちや行動も変わっていくのだと気づいた。

また、竹中さんの行動力にも驚かされた。路上で病気の子どもを見つけた際、すぐに施設やボランティアへ連絡した話からは、「かわいそう」と思うだけで終わらず、実際に行動することの大切さを感じた。ネパールでは、病院に行くお金がなく「病気になれない」という人がいることや、障害を持つ子どもたちが施設の中で暮らしている現状も知った。さらに、女子が生理中に小屋へ閉じ込められ、命を落としてしまう地域があることには大きな衝撃を受けた。日本では考えられないような環境の中で生きている人々がいることを知り、自分がどれほど恵まれた環境で生活しているのかを改めて実感した。一方で、そのような厳しい状況の中でも、「日本の友達ができたら僕の人生は幸せ」というネパールの子どもの言葉が印象的だった。物の豊かさだけでなく、人とのつながりや日々の小さな幸せが、生きる支えになるのだと思った。また、親のいない子どもたちが、自分たちは質素な食事をしているにもかかわらず、おもてなしとして具の多いカレーを渡していた話から、人を思いやる優しさの大切さも学んだ。

今回の講話を通して、私は「当たり前」は決して当たり前ではないことに気づいた。学校へ行けること、温かい家で過ごせること、夢を語れること、選択肢があることは、とても幸せなことである。これからは今ある環境に感謝しながら、自分の夢に向かって努力していきたい。そして、困っている人を見たときには、見て見ぬふりをせず、自分にできる行動を考えられる人になりたいと思った。

⑥
ネパールのことをそもそも詳しく知らなくて、とても安全な国だったりダルバードが主な食事で右手で食べることに驚き新しい気づきになりました。竹中さんの活動は何らかの理由で家族と一緒に暮らすことができない子供たちを保護・支援するというものでした。路上で生活している人が5000人以上いて、毎日物乞いをして厳しい生活を送っている子供がいました。また南ネパールでは砂で家を作っていたり、学校に行けず夢を堂々と語ることのできない現状でした。町から外れると、病院がないことで診察を受けられず病状が悪化していく中で薬をあげようとしても、たとえ治ったとしてもその後生活できるお金がなく薬を受け取ってくれなかったりと困っている人たちがたくさんいました。ですが、家族を災害や経済の理由などで失って施設で暮らしているのに、子供たちは明るく前向き。夢を語れない環境で日々厳しい暮らしを送っているのに盛大におもてなしをしてくれる。幸せに見えなくても、「日本人と友達になれた」だから幸せと言っている。普通は、自分よりも良い暮らしを送ってネパールに半年も居れる余裕がある人がいたら、うらやましく思ったり、嫉妬したりするのに来るたびに感謝を伝えたり、喜んでくれる。それは、竹中さんの困っている子供たちに施設や物資を提供したり、家賃や借金を払ってあげるという優しさや思いやりがネパールの子供たちにそう思わせているんだと講演でネ

パールで滞在している時の生活を聞いて深く感じました。また、子供たちと楽しく暮らせるようにするのが「生きたい在り方」とおっしゃっていて、子供たちを助けるために活動を続けているのはすごいと感銘を受けました。

⑦
自分の幸せ、自分の人生について深く考えさせられる講演でした。
今までは自分の幸せについて、自分単位のものでしか頭に思い浮かばなかったけれど、講演を聞いてみてからは、自分の幸せとは自分単位のものだけではなく、自分の悩みをきいてくれたり、一緒に感情を共有できる周りの人がいて、その人と時間を共有できる時間があること、まさに今の当たり前も幸せに含まれているんだと思いました。そこに今気づけて良かったと思いますし、この気づきを大人になっても大切に持ち続ける事ができてこそ本当の幸せが見えてきて人生も豊かになっていくのかもしれないと思いました。

さらに私達を満たしてくれる、人生に彩りを与えてくれる物や娯楽は確かに心を満たしてくれるけれど、“人生、”という大きなスケールで考えたとき、本当に必要なのはなにかも考えさせられました。

俊さんが人生に必要なものはお金を対価に支払ってでも得たいと言っていたように、私も沢山の経験や積み重ねのなかで、本当に必要なものを厳選していきたいと思いました。人はだれでも幸せに生きたい、認められたいと思って一生懸命に命を削って生きますが、今ある当たり前、更には幸せになりたいと思って命を削って得たものでさえも幸せと満足できない事があると思います。そんな時に自分の幸せに気づける人こそ本当の幸せを手に入れられると思いました。

この講演を聞いて、私が知っている価値観や思考は狭い世界で構成されたとても小さなものなんだなと思いました。同じ境遇でも考え次第では、幸せを見つけることができたり、見つけることができなかつたことで本来ある幸せを自ら壊して手放してしまったりするものだと思います。これは幸せについてだけの話ではないし、その違いを生む価値観や思考を広げておくためにもさらに様々な人の自分ではたどり着けないような思考や感情や価値観を得られる機会を得たいし、それで得たものを大切にしていきたいと思いました。今はまだ実際に現地に行くことは難しいですが、今ある幸せを大切にしたり、更に多くの人の思考や価値観や感情を得られる機会を掴みに行くために学び、成長しようと思います。

⑧
本日、竹中さんのご講話を聞き、特に心に残った箇所が二つあります。

一つ目は、ネパールの子供達に夢と幸せについて尋ねた時のお話です。年端も行かない子供達が、夢を語るのに言葉を詰まらせたり、「次の人生は」なんて枕詞を添えている状況に、現実の非情さを感じました。そんな子供達に、無責任に希望の言葉を押し付けず、今ある幸せの再確認をさせる大人達も印象的です。夢を諦めている子供達の言葉に否定の言葉を返せない心苦しさは、どれだけ大きなものなのか。それでも今の環境下で最大限の幸せを与えるために、教を解く大人達の偉大さや、それに応えて前向きに生きる子供達の健気さなど、様々なものに思いを巡らせては、環境の違いという世界の大きな課題がどれだけ深刻なものであるかを意識させられました。

二つ目は、物乞いの現実についてのお話です。国により、物乞いが非日常でもなんでも無い、ありふれた物になってしまっている現状を改めて知りました。病気で危篤な子供でさえ、物乞いの道具へと変貌しているのは、残酷な現実だなと思いました。しかし、誰もその親を咎めることはできないし、してはいけないとさえ感じます。また、自分が物乞いをされた立場だったら、どうするだろうとも思いました。目の前の手を差し伸べられる範囲の人だけでも救うことを善とするか、最初に話かけられた一人しか救えない上、継続的なケアすらできない状況で、自分の気が晴れるという理由で踏み込むことは正しいことなのか、正解のない問題だと感じます。だからこそ、貧困の根本的な解決に目を向けることがとても大切だと思います。

他にも、様々なお話を聞き、世界の貧困に目を向ける大きなキッカケになりました。貧困地域の過酷な現状に対し、ただ可哀想、と他人事に捉えるのではなく、どんな環境下でも懸命に生きる人々に目を向け、その上で人間として保障されるべき権利を行き届かせるため、自分たちにできる小さなアクションを起こしていきたいと思いました。

⑨

竹中俊さんの講演を聞いて、私は今まで知らなかった世界について多くのことを学ぶことができました。特に、竹中さんがネパールで10年間も生活しながら、児童養護施設の子どもたちを支え続けていたことがとても印象に残り、自分たちの当たり前の日常について改めて考えさせられました。言葉や文化、生活環境も大きく違う中で、実際に現地へ行き、自分にできる支援を続けている行動力にもとても驚かされました。

また、ネパールの子どもたちの生活は、私たちが普段送っている生活とは大きく違っていて、同じ世界に生きていても環境によってこんなにも差があるのかと驚きを隠せませんでした。しかし、そのような厳しい環境の中でも、子どもたちが笑顔を見せたり、夢を持って生活していたりする姿がとても印象的でした。私は今まで、海外の貧しい国の人たちに対して「かわいそう」というイメージを持っていましたが、それだけではなく一人一人が前向きに生きていることを知りました。

私は小さい頃多言語サークルに入っていて海外の人をホームステイに受け入れ交流したり、様々な言語に触れる機会が多くありました。小学5年生の時にはロシアへホームステイに行く予定がコロナの影響で中止になってしまい、その代わりにオンラインで韓国の同い年の女の子と交流をしました。実際に話してみると、住んでいる国や文化が違って、同じように笑ったり楽しんだりできることが分かり、とても楽しかったことを覚えています。その経験があったからこそ、今回の講演にも強く興味を持つことができました。

今回の講演を通して、私は「知ること」の大切さを感じました。今までは海外の貧しい国について、ニュースや写真でしか知りませんでした。実際に現地で生活した竹中さんの話を聞くことで、そこで暮らす人たちの現実や思いをより身近に感じることができました。また、自分とは違う環境で生きる人について知ろうとすることが、相手を理解する第一歩なのだと思います。これからは、日本の中だけではなく、世界にも目を向けながら、さまざまな価値観を学んでいきたいです。

⑩

今回の竹中さんのお話を聞いて、ネパールの文化や現在の生活状況について多くのことを学んだと同時に、自分の幸せについて、改めて見つめ直すことができました。

私は、家族や友達と一緒に過ごす何気ない時間が1番幸せだと感じています。竹中さんのお話には、それは人生に必要なものなのかとおばさんに尋ねられたというのがありました。そのお話から私は、欲しい物を買ったときに感じる幸せは、その一時の安心感や優越感であり、それは本当の幸せではないのだと気が付きました。ネパールの子どもたちの幸せも、私と同じでした。帰る家があること、おいしいご飯を食べられること、一緒にいてくれる家族や友達がいることは誰にとっても1番の幸せだと思います。

また、その幸せの輪を広げていくためには、教育というものは必要不可欠だとわかりました。ネパールでは、性教育が発達しておらず、望まない妊娠や児童妊娠が多いということを知り、自分の身体について正しく理解することで、孤児を減らすことができるのではないかと考えました。月経についての環境整備や支援も行うことで、母子ともに守ることができると思います。

今ある幸せを大切にして、自分にできることを見つけて、世界中の幸せを祈りたいです。

⑪

今回の竹中さんの講演を聞いて、不自由のない生活を送っている私たちはなぜ孤児院にいる子供達よりも前向きに世界を考えることができないのか考えさせられた。

私には帰る場所もあるし、食べ物もあるし、教育を受けさせてもらっている、私は非常に幸せ者だと今は思う。だが私が中学生の頃、自分のことを不幸せな人間だと思っていた。私は塾に通っていたが、周りの人間は私よりも成績が良かった。それだからか私はよく遠回しに馬鹿にされた。今思えば、その環境も悪かったと思うが、一番悪かったのは、自分が言われた言葉を間に受けてその場で立ち止まってしまったことだ。孤児院にいる子供達は私が暮らしているところよりもはるかに過酷な環境にいる。だが、彼らは辛い現実も前向きに考え、動画や写真では笑顔を浮かべる姿が映っていた。過去の私がしなければいけなかったことは、前向きに事を考えることと行動することだ。

この講演で一番驚いたのは、それをあの過酷な環境で幼い子供たちが知っていることだ。それを最初私はすごいことだと思っていたが、話を聞いていくと社会が子供たちに「夢は叶わないから今ある幸せを大切にしよう」と教えているのだ。前向きに考えようとする子供達の心理はここからきている。私はなんて幸福だろうと思う。竹中さんが言っていたように、子供達に満足した生活を与えられない社会なんておかしい。

自分にできることをしても彼らの環境を変えることはできない。だが、彼らと向き合うことが私たちに必要だ。これからも友人と共に勉学に励み、前向きに未来を考えていこうと思う。

⑫

私は今日の講演を聞くまで、世界に興味があったり将来世界を平和なものにできたらいいなと大雑把な考えを持っていました。昔から音楽が好きでグローバルに音楽を広めていける職業に就きたいと考えていましたが、竹中さんのお話を聞いて、視野が広がったのと同時に、知りたいことや実現させたいことを明確にすることができ、とても貴重な時間を過ごすことができました。

最初に暮らした家のママのお話で、「人生において必要なもの」について自分でも深く考えながらお話を聞いていました。私は好きなことである音楽や生活を彩るものは必要だと思っていますが、竹中さんと同じで経験や体験も必要だと強く思いました。人生において忘れられない出来事や景色は、ずっと持っておきたいと思うことが出来ると思っているので、経験や体験をすることにもっと積極的になろうと思いました。また、ママが病気になるために言葉に意識を向けると話していた事も、私の中ですごく印象に残っています。単なる言霊だけではなく、聞く言葉、話す言葉の一つ一つに大きな影響力があり、良い言葉やあたたかな言葉は健康へと繋がるのは本当だと思いました。私もいつも人の言葉に悩まされますが、自分を救ってくれるのも言葉だと気づくことができました。

児童養護施設の子供たちとの出会いも竹中さんの人生を大きく動かしたものだと思いました。貧しい暮らしをしている子供たちは、私たちが当たり前に行っていることは当たり前ではなく、常に今を全力で生きているように見えました。私たちは今当たり前スマホや財布を持っていて、そのようなものばかりに夢中になっています。目の前の友達との会話より画面ばかり見るがあります。家族と今日あった出来事を話すことより画面ばかり見るがあります。今の私たちにとってそのような時間は必要かもしれませんが、養護施設の子供たちは友達とご飯を食べることや遊ぶことができ幸せだと言います。私は当たり前学校に行くことができ、満足にご飯を食べることもでき、友達も沢山いて未来も明るいです。けれど、ネパールの人々や子供たちの笑顔の方が綺麗だと思ってしまいました。今の私は小さなことを気にしていたり、上手く笑えないことがあります。貧しい暮らしをすることを良い事だと言っはいけないと私は思いますが、ネパールの人々や子供たちは、貧しい暮らしをしている分、言葉や考え方、生き方が美しいなと思いました。私も小さな幸せを大切に生きていこうと思いました。

世界で苦しむ人達は沢山いるけれど、日常の中で少しでも楽しいことがあると「幸せだ」と言ってくれる人がいることを知りました。このことから私は世界中に楽しい、幸せと思えるようなものを届けたいと思いました。私は、将来音楽を通して人を繋ぎ、少しでも明るい場所を作っていけるようになるために、より世界について知りたいなと思いました。知らない文化について知ることや、人と出会うこと、新しい経験や体験などから逃げずに生きて、自分の人生を価値のあるものにしていきたいと思いました。今日は貴重なお話を聞くことができよかったです。

⑬

私が講演を聴いて初めて知ったのは今回の講演の主な舞台となるネパールが世界地図で見ると日本からさほど離れていない場所に位置していることです。飛行機で約8時間しか離れていない国で満足に教育を受けることができない子どもたちがいることに驚きを感じました。特に印象に残った言葉は竹中さんと泊めてもらっている家のお母さんとの会話でした。命という対価を払って働き、その対価から得られたもので手に入れたものは人生において本当に必要なものなのか、と問われたことをきました。それをきっかけに私たちの生活には一時的な満足感を満たすだけの不必要なものに溢れており、人生において本当に必要なものは不必要なものに埋もれてしまっているのではないかと思います。そこで物ではなく、言葉を意識しているのだと聞きました。日本にも言霊という概念があるように、言葉には感情やエネルギーをコントロールする力があり、外に吐き出している言葉を聞いているのは他ならぬ自分自身です。だからこそ、言葉を整えていくことが自分自身を変える一歩になるのではないかと思います。

また、ネパールでは物乞いをせざるを得ない人々や、路上で暮らしている多くの孤児たちがいることなど深刻な課題を多く抱えていることを現実も知りました。私たちよりも幼い子どもたちが過酷な環境ゆえに学ぶ機会を得られず、そして将来の夢を語れずにその夢を諦めてしまう現状を知りました。しかし、そのような環境の中でも子どもたちは日常の小さな喜びを大切に生きていくといいます。今日の前にある小さな幸せを見失わずに生きていくことが大切なのだと感じました。竹中さんの団体が行っている、ネパールでの性教育や女性の月経の支援は子どもや女性たちが自分の心と体を守り、健康に生きていくために欠かせない教育です。ま

た、施設に預けられている子どもたちの母親の支援もしていることを知り、過酷な状況のなかでも親子が再び共に暮らせる未来や、家族の絆を守るための大切な一歩なのだと強く感じました。

今回の講演を通じて、自分にできることは何があるだろうと考える機会ができました。1番簡単な方法は今の環境を大切に、それを将来まで維持し続けることや、支援活動をしている人の講演を聞きに行くこと、加えてSNSで情報を集めることなどできることはたくさんあることに気付きました。この講演で得た大きな気づきを胸に、まずは自分の日々の言葉や行動を意識して変えていくとともに、世界が抱える課題に対して、これからも関心を持ち続けていきたいです。

⑭

今日の講話を聞き、「普通」とは何かを改めて考えさせられました。

ネパールには標高の高い山が数多くあり、中には標高4900mの位置に住んでいる民族がいたり、4500m以下は「丘」と呼んでいることを知って非常に驚きました。他にもネパールの食事文化や国旗の由来などの惹かれる内容がたくさんあり、話が自然と入ってきました。

竹中さんが大学生の頃のネパールでの体験談も非常に興味深い内容ばかりでした。泊まり先の家族の方々のお話も非常に多く学ぶことができました。特に印象的だったのは病気にならないために言葉を意識しているということでした。私は「病気」と聞くとすぐに薬や病院などを考えていましたが、ネパール人は山を下るところから始まることを聞いて、住む環境によって考え方など全く違うものなのだと考えさせられました。

またネパールでも都市から離れたところではかなり劣悪な環境下に置かれている人々も少なくないことがわかり、世界にはまだ不足していることが沢山あると改めて感じました。7歳や9歳の小さい子どもたちが夢を語っても無理だと言われてしまう現状や本人たちも夢を叶えることができないとわかっていて来世のことを話していたというお話を聞き、非常に胸が痛くなりました。他にも、物乞いをして暮らしている親子の話でも、子どもを使って物乞いをしている母親の話がとても強く印象に残りました。そのようなことをしないと生きていけない現状が今も尚続いていると思うと何かしらできることがないのだろうかとなりました。施設を出た子どもの話も印象的でした。孤独を感じたり、苦しい生活にも関わらず「戻ってきて上手いかなかった姿を見せるのは、今施設にいる子どもたちに大人になることへの不安を与えてしまう」と考えられる現地の人たちの思いやりや優しさを非常に強く感じ、「今ある幸せを忘れずに生きる」というネパールの教育方針が非常に素晴らしいと感じました。

竹中さんは最初は世界など興味もなかったと語っていましたが、ヒッチハイクでの経験などに背中を押され、海外に行って行動してみることで新しい世界や課題を見つけられており、自分も今は興味が無いことでも将来的に繋がるものがあるのかもしれないと考え、まずはとにかく行動してみる事が大事だと思いました。これから先、まずは興味があるものや気になったものをとことん追求して自分にしかできないアクションなどがないか考えてみたいと思いました。